



魔法の帽子

あの時、デカパンとあかねちゃんがどうして丘の上の公園に行ったのか、私たちが何度聞いてもふたりは答えてはくれませんでした。

でも二人がどんなに悲しかったか、ニワトリたちの死がどんな二人を傷つけたか、私にはわかるような気がします。

私は今でも、時々ニワトリのことを思い出します。ほかの大人たちはニワトリなんて養鶏場にいけばいくらでもいるといいます。

でも名前をつけていっしょに遊んだニワトリは、只のたまごを生むだけのにわとりとはやっぱり違う。だから、死体の発見されなかった雄ニワトリのピーだけでも、実はうまく助かっていて、ひとりではるか遠くのドングリ山のニワトリ園にたどりついて、仲間のにわとりたちと一緒に元気に暮らしながら、私やあかねちゃんや、デカパンや、それから佐倉先生が会いにいくのを待っていてくれる、そんなこと考えてしまうんです……。

ある町の小学校の中にある学童保育園の二人の先生と子供たちの物語。学童保育園で飼っていたニワトリの死を通して、生命の尊とさ、生きることの喜びを描いた戯曲。

「魔法の帽子」

登場人物

佐倉先生 女、五十五、学童保育園の先生
吉村さん 女、二十五、学童保育園の先生
道子 女、三十、あかねの母
松 女、七十、あかねの祖母
ゆき 女、五年生
ヤス 男、五年生
隆男 男、六年生
良太 男、六年生
山田 男、小学校の校務員
校長先生 男
あかね 女、五年生
デカパン 男、十八

1 ハロウィン

十月の或る晴れた日のことである。
或る小学校の校舎の中に学童保育園がある。舞台は学童保育園の部屋の中。上手に入口、入るとすぐ靴脱ぎ場になっており、部屋の中は畳が敷いてある。部屋のうしろにランドセルや私物を入れる棚があり、その横は本棚になっている。後ろの壁には秋祭りのミコシの絵がかかっている。部屋全体が明るい秋の色どりになっている。
佐倉先生が本棚の本を整理しており、吉村さんがほつきで靴脱ぎ場を掃いている。

吉村 (入り口から空を見ながら) 先生、いいお天気ですよ。

佐倉 ほんと。この間の運動会も今日みたい

だったら、もつと楽しかったのにね。

吉村 お昼休みに急に大雨が降ってきたから、みんなお弁当をもったままグルグル走り回ってそれで、学童の部屋に逃げ込んだって言っていました。

佐倉 そうなの。まるで運動会みたいで、学童に關係ない子までいっぱいやってきて、でも一番先に逃げてきたのは校長先生。

吉村 (笑いながら) そうですね今日は確か二年生が秋の遠足でしたね。どんぐり山だったかな。

佐倉 そう。春に学童からみんなで行ったでしょ。どんぐり山のよく見える大きなハラツパのあるところ。

吉村 あの時はサツキが満開だったわ。

佐倉 違うわ。ツツジですよ。満開だったのは。

吉村 いいえ。サツキです。あそこにはツツジなんかありません。

佐倉 ツツジです。

吉村 サツキです。

佐倉 ツツジです。

吉村 (笑いながら) 先生、どちらでもあまり変わらないんじゃないですか。

佐倉 (笑いながら) 吉村さんこそ、頑固ねえ。

吉村 そういえば、サツキのところでお弁当を食べている時大変でしたね。

佐倉 そう、私たちがツツジを眺めながらお弁当を食べていたら、いつのまにか男の子たちが一人も居なくなつて。

吉村 女の子がみんな捜したら近くの大きな木の上に乗って遊んでいた。

佐倉先生と吉村さんが舞台中央に並んで、木の上の子供たちを呼びかけるようなくさで芝居をする。

佐倉 皆で木の下に集まって降りなさいって言っても誰も降りてこないで。

吉村 突然、木の上で一人の子が先生の後ろの藪を指さして「あー、先生あぶない」。

佐倉 って叫んだのよね。

吉村 先生がびっくりして後ろをふり返ってみると。

佐倉 熊よ、熊、大きな熊がノ・とつしろの藪の陰に立っているの。

吉村 私もびっくりして、「みんな、寝たふりして」って叫んだ。

佐倉 私はその前に気を失っていたみたい。

暫くして気がついたら、みんなばったり寝ころんで、女の子なんかゲラゲラ笑ってたわ。

吉村 おかしかったのは、木の上の男の子達まで木の枝に跨がって寝たフリをしていましたね。

その時、五年生のヤスとゆきが入ってくる。ヤスはキチンとした小学校の制服で、ゆきははでな普段着。

ヤス (きちんと立って) 先生、今の話、本当のことなんですか。

佐倉・吉村 (二人に) あら、お帰り。

ゆきは部屋の隅に置いてある段ボールの箱の中を見ている。段ボールの中にはハロウインの仮装用の魔女の帽子や動物の面が入っている。面は子供たちが作ったもの。ゆきが帽子をかぶったり、面をつけたりしている。

ゆき 本当よ。ね、先生。

吉村 あ、ヤス君は最近入ったから知らなかったんだ。ゆきは知ってるね。

ゆき 熊が出たのは本当。

吉村 佐倉先生がびっくりして気を失ったのも本当。

佐倉 皆なが寝たふりしたのは、半分本当。

ゆき (仮装の熊の面をつけ、おどけて) で

も、熊は熊でもぬいぐるみの熊。どんぐり山で熊が出たなんておどかしても、幼稚園の子でも本気にせえへんよ。

吉村（笑いながら）そう、正体はデカパン。自分で熊のぬいぐるみを作って、みんなをおどかそうと思ってノコノコやってきたのよ。

ヤス なんや、そういうことだったんですか。最初はちよつとびつくりした。

ヤスは本棚から本を持ってきて読み始める。ゆきが魔女の帽子と、奇妙な顔の魔女の仮面をつけて、佐倉先生と吉村さんのところにくる。

ゆき デカパンは頭がトロいくせに、そんなことさせたらうまいんよ。

佐倉（ゆきをにらんで）ゆきちゃん、デカパンのこと、頭がトロイなんて言うんじやないのよ。

ゆき トロイやん。この間あかねちゃんに算数の問題見せられて悩んでたわ。それも三年生の問題。あの二人は似たようなもんやけどな。

吉村 ゆきちゃん、それハロウインの時に使う仮面だから壊さないでちょうだい。

ゆき ハロウインで、なんで仮面なんかつけるの。

吉村 なんてだろう。

佐倉 アメリカの子供達のお祭りだからじゃない。アメリカ人の子供たちって仮面が好きなのよ。テレビでもやってるじゃない。

ゆき ふーん。私これにする。

吉村 それは魔女の帽子と仮面よ。

ゆき いいじゃん。これ、おもしろそう（といいながら部屋のすみのほつきをもってきてまたがって）

ゆき 先生、今日はデカパンは。

吉村 今日はお休みよ。ほら水曜日はデカパンは町のはずれにある作業所で働いてるで

しよ。

ヤス ぼく、この間、作業所で働いているデカパンを見ましたよ。でもあそこで働いている人はデカパンと同じような人たちばかりなんですネ。

佐倉 あそこで働いている人は身体や心に障害を持った人たちだけど、みんな私たちに負けないぐらい一生懸命に働いているでしょう。

ゆき デカパンが居てへんならチビパンでいい。何かして遊ば。

吉村 だめ、先生はまだみんなのおやつを用意や掃除をしなきゃなんないの。それにチビパンで言った子とはいつしよに遊ばない。遊ぶんならヤス君と遊びなさい。

ゆき ヤス、魔女ごっこしようか。

ヤスはゆきを無視して本を読んでいる。
。ゆきがいきなりヤスの背中をふんづける。悲鳴をあげるヤス。

吉村 ゆきちゃん、なんてことするのよ。

吉村さんがゆきをおいかける。ゆきがまたヤスの背中をふんづけて逃げる。ゆきをおいかけた吉村さんが誤ってヤスの背中をふんづけてしまう。

「イデー」、「フンギヤー」といいながら本をもつて転げるヤス。「あ、ごめん」と言つて謝る吉村さん。その二人の周りを、魔女の仮装姿で走り回るゆき。

ゆき (佐倉のそばに来て) でも、先生がデカパンのことを言つてたよ。学童にいつもきているあの身体の大きな子は問題だなんて。

ヤス 僕の先生もいつてました。デカパンはもう大人だけど、少し頭が弱いから気がつきたほうがいいって。

佐倉 デカパンはね、頭が弱いんじゃない。人と争ったりすることができないだけよ。

デカパンはあなたたちをいじめないでしょ。デカパンは背中を踏んづけたりした？。

ヤス デカパンに背中を踏んづけられたら死んでしまう。

ゆき (ヤスのそばにきて) ヤス、私と結婚しようか。そしたら、毎日、背中ふんづけたいよ。

吉村 ゆきちゃん。なんてことなの。

ゆき (吉村に) そやけど、デカパンはチビパンのこと好きなんやて。

吉村 違うでしょ。デカパンが好きなのは佐倉先生よ。

ゆき なんでよ。こんなババアやのに

佐倉 (ゆきをみつめて) ゆきちゃん。ババアなんていうもんじゃないよ。

吉村 あら、佐倉先生は顔はおばあさんだけど、心は子供のよにきれいだよ。

佐倉 こら、吉村さんまで。ともかくゆきちゃんもヤス君もデカパンのことをそんなふうに言ったらあかんでしょ。デカパンのことを悪く言う人は学校の先生だろうとみんなその人が悪いのよ。その人はデカパンのきれいな心がわからない情けない人なんだから。それにほらあかねちゃんだって学校に行けないけどデカパンだったら一緒に勉強したり、遊んだりしているでしょう。

吉村 ゆきちゃん、遊ばないんだったら、ピ―ちゃんに餌あげて頂戴。

ゆき ピ―はあかねちゃんの鶏やんか、餌係はあかねちゃん。そやけど、今日はあかねちゃんも来てないね。

ヤス (本から顔をあげて) デカパンが居てないからと違いますか？

吉村 そうかも知れないわね。ゆきたちはあかねちゃんと遊んであげないでしょう。どうしてなの。デカパンのようにあかねちゃんと一緒に遊んであげたら。

ゆき そやけど仕方ないわ。あかねちゃんは

学校に来ないんやから。
佐倉 学校に行つてなくても学童では関係ない。ここではみんな同じ。

ゆきが部屋の隅にある鏡で、仮装の魔女の姿を映して見ている。

ゆき 先生は何になるの。

佐倉 お姫さま。

ゆき ウッソー。

佐倉 吉村さんは。

吉村 私は、普通の村のおばさん。

ゆき じゃあ、魔法使いのおばあさんは誰かなる。

ヤス それはやっぱり佐倉先生がピッタリじゃないですか。

吉村 (笑いながら) 先生、わたし先生に合わせて魔法使いのおばあさんの仮装を作ったんですけど。

ゆき ばばあにぴつたりなんと違う。

佐倉 (ゆきをにらんで) じゃあ、ためしに魔法使いのおばあさんになってみようか。

佐倉先生が下手に入る。上手の入口のほうから隆男と良太が帰ってくる。二人は少し慌てている。

隆男 大変や。鳩が死んだ。

ヤス どうしたんですか。

隆男 良太が、その公園で鳩に石を投げたら鳩にあたつたんや。

良太 違う。僕のせいやない。隆ちゃんが鳩をつかまえたからや。

吉村 (隆男が手にもっている鳩を覗き込んで) かわいそうに、羽根がとれかけてるやないの。

ヤス でもまだ生きていますよ。

ゆき (舞台袖の佐倉に大声で) 先生、鳩が死ぬ。隆男と良太が鳩を殺した!!!

佐倉先生が魔法使いの仮装姿で上手から出てくる。その姿を見て、驚く隆男と良太。

佐倉 (隆男のそばに来て鳩を覗きながら)
隆男、先生のいうことを忘れたの。生き物をいじめないって。良太、先生と約束したでしょ。生き物を殺さないって。忘れたのなら、先生にもう一度約束して。もう決つて弱いものや小さなものをいじめないって。決して殺したりしないって。

子供たちが、一瞬佐倉先生の強い調子に驚くが、突然ゆきが佐倉先生に訴えるように。

ゆき 動物を苛めないって約束したら、この鳩を助けてくれる。

佐倉 え、

ゆき 鳩を助けて、先生鳩を生き返らせて。

吉村 ゆきちゃん、どうしたの。

ヤスが本棚のところを走っていき、本棚から一冊の本を取り出して佐倉に見せに行く。

ヤス ほら、これ、この本に書いてあります。魔法使いのおばあさんは、魔法の帽子を使って死んだ小鳥を生き返らすんだ。

ゆき 先生、私たち生き物を苛めない。悪いこともしない。だからお願い、この鳩を助けて。

みんなが真剣な表情になって佐倉先生のほうを見る。吉村さんが隆夫から鳩を自分の手にとって、佐倉先生の前にいく。

吉村 (ひざまづいて村娘のふりで) おばあさん、魔法使いのおばあさん。あなたの魔

法でこの鳩を生き返らせてくださいな。

佐倉先生が、吉村さんから鳩を受け取ってかぶっていた帽子の中へ包む。暫くその鳩を見つめてから、帽子の鳩を空中に放つ。すると鳩が空中に飛び出して、部屋の中をグルグル飛び回る。

隆夫 あ、鳩が生き返った！

良太 本当だ、鳩が飛んでいる。

ゆき（入り口から外へ飛んでいく鳩を指さしながら）見て！、見て！、鳩が行き返って大空に飛んでいくわ。

ゆきだけにライトがあたった後、
暗転。

2 にわとり

前場と同じ学童の部屋の夜のことである。舞台は全体に窓から差し込む月明かりのみで暗い。

校長先生と、校務員の山田が上手から登場する。二人は学童の部屋に人がいないのを確かめると、まるでドロボウのようにして部屋に入ってくる。部屋が暗いので校長も山田も歩きにくそうである。

校長（観客席のほうを指差して）あれかね。最近学童で飼い始めた鶏というのは。

山田 そうですぞ。ほれ、あんなに砂を掘って、なんという忌々しいにわとりじゃ。

校長、わしがあれほど学童で生き物を飼ってはいかんと言ってきたのに。わしの言葉を無視しおって。

山田 そうですぞ。学童の餓鬼どもときたら、となりのわしの部屋まで来て、走り回る

のですぞ。これもみんなあの忌々しい鶏のせいじゃ。

校長 それにしても焼き鳥にしたら旨そつじやな。

山田 若鶏ですからな。いつそ今ここで絞める、校長先生の部屋にお持ちしますかな。

校長 わしは鳥には目がないからのつ。

山田 それじゃあちよつと、わしがこの手で捕まえて。

山田が腰をかがめて、両手で鶏を捕まえるような格好をしながら、下手のほうへ。校長が同じような格好でその後ろに続く。

その時、下手から鶏の面をつけた隆男が登場。山田の前に立ちふさがる。

山田 お、こりゃあ、お誂えむきじゃ。鳥のほうからやってきましたぞ。

言いながら隆男を捕まえようとす。隆男がサツと逃げると、あわてて山田がその後を追う。

その時、良太が同じような鶏の面を付けて登場、校長の前に立ちふさがる。

校長 や、山田、何をしておる。鶏がわしを襲ってきたではないか。

山田 校長先生、何を言っとなさる。わしはこうして鶏を追って。

校長 (逃げながら) バ、バカ、早くつかまえんか。何をしとるんじゃ。

山田 や、校長先生を襲っている鶏がいると
いうことは、鶏が二羽？

と言いながら校長のほうを見る。良太はすばやくかがんで隠れる。

校長 そうじゃ、いつもまにか二羽になっていたのかもしれないぞ。

と言いながら山田のほつを見る。隆男
はすばやくかがんで隠れる。

校長・山田 （顔を見あわせて）やっぱり一
羽じゃ。

二人で怖そうに後ろを振り返る。する
とゆきが魔法使いの格好で登場、ヤス
が熊の面をつけて登場、四人でいつせ
いに校長と山田に襲い掛かる。

校長・山田 うわあ、鶏が化けた！

と言いながら舞台中を逃げ回り、その
後、暗転。

3 バス停

夕暮れである。

舞台中央に、バス停の標識とベンチが
ある。ベンチに佐倉先生と吉村さんが
座っている。学童の仕事帰りで、佐倉
先生はハロウインの大きなカボチャを
抱えている。背景に夕焼けが広がって
おり、バス停の横にある木の葉は色づ
いている。

佐倉 今日は本当に面白かったわ。

吉村 ええ、みんな面白い仮面を作って。ハ
ロウインってアメリカのお祭りと思ってい
たけど、子供達には何でもいいんですね。

佐倉 でもみんな魔女が好きなのね。私たち
は魔女ってほら怖いおばあさんとはっかり
思っていたのに。

吉村 前に「魔女の宅急便」ってアニメの映
画があったですよ。あれに出てくる魔女
はかわいい女の子だから、みんなあんな

だと思ってるんじゃないですか。

佐倉 隆男と良太がかぶっていた鶏の仮面は
ピーにそっくり、やっぱり六年生。

吉村 二人ともピーを守るんだって言ってま
したよ。ほらこの前、校長先生が、学童で
鶏を飼ってはいかんと行ってきたのを、二
人は聞いていたんです。

佐倉 そうそうそんなこと言ってたわねえ。
私ねえ、この間へんな夢みたの。子供たち
がみんなハロウインの仮面をかぶって、鶏
を捕まえにきた校長先生を脅かしてピーを
守ってやるの。

吉村 (あまり興味なさそうに) へー、面白
そうですね。今度子供たちで、そのお芝居
をしましょうか。

吉村先生がベンチから立って、上手の
ほうを何かを探すように眺める。

佐倉 どうしたの。

吉村 ええ。

佐倉 だれか、待ってるの。

吉村 待ってるんじゃないんですけどね。

その時、上手から「スミマセン」と
いう声が聞こえ、野球のボールが吉村
先生の前に転がってくる。慌てて吉村
先生がボールを拾って投げ返す。

吉村 (ベンチに座りながら) デカパンが来
てるんじゃないかと思って。

佐倉 デカパン？

吉村 ええ、昨日私が帰る時、デカパンがこ
こまで見送りにきてくれたんです。

佐倉 ああ、デカパンはよくバス停まできて
私がバスに乗ったら手を振ってくれたりす
るの。そう、吉村さんにも見送りに来てく
れたの。

吉村 (困ったように) 先生。

佐倉 え、

吉村 先生、先生には悪いんですけど、私それ、あんまり嬉しくないんです。

その時、また「スミマセーン」という声が聞こえる。吉村さんが立って上手に向いて構えるとボールが転がってき、吉村さんが拾って投げ返す。

佐倉 そうねえ。吉村さんはデカパンに手を振ってもらってもあんまり嬉しくないわね。

お嬢さんですものね。

吉村 そんな意味じゃ。デカパンはただ素直に手を振ってくれてるだけだってわかってるんですけどね。

佐倉 吉村さんは「見かけ巨人」って知ってる。

吉村 なんですか。それ。

佐倉 見かけ巨人は、遠くから見ると大きな怖そうな巨人なんだけど、近寄ってみると普通の背の高さで、ちっとも怖くないの。

吉村 ああ、思い出しました。確かミヒヤエル・エンデの物語に出てくるんでしょう。

佐倉 そう。デカパンはね。見かけ巨人なのよ。身体は熊みただけで、心は小鳥みたいで、誰に優しくしたいのよ。

吉村 そうですね。もちろんデカパンが私に優しくしたいっていうのはよくわかるし、それは嬉しいんですけど。

その時、また「スミマセーン」という声が聞こえる。今度は佐倉先生が吉村さんを制して立っていき、上手に向かって身構える。するとたくさんのボールが一度に舞台の上に転がってくる。あわてて、佐倉先生と吉村さんが拾って集める。佐倉先生と吉村さんが「ひとつ」「ふたつ」と数えながらボールを投げ返す。

吉村 (ベンチに座りながら) でも、町の中

でデカパンと二人で歩いていると、少し恥ずかしいんですね。先生は何でもないんですけど。

佐倉（ベンチに座りながら）そう。吉村さんでもそうなら、他の人がデカパンを避けたがるのは仕方がないのかも知れない。

吉村 すみません。私、本当にこんなこと言っただけで、本当は私の方こそ嫌な人間なんです。きつと。

佐倉 違うわ。謝るのは私のほう。吉村さんがデカパンのことで、学校の先生やお母さんたちにいろいろ言われて悩んでいるのは知っているのよ。

吉村・・・

佐倉 でもデカパンは人より身体が大きいから、大きい身体を使って、弱い人や苛められている人の身代わりになりたいと思っているの。私はデカパンを信じてやりたい。あの子の純粋な気持ちを信じてやりたい。そう思っているのよ。

また上手から「スミマセン」という声が聞こえる。今度はあわてて佐倉先生と吉村さんが並んで身構える。

するとしばらくして、二人のチンドン屋が笛とかねで登場する。チンドン屋の後ろから熊のぬいぐるみを来たデカパンが、ちんどん屋の音楽に合わせて踊りながら入ってくる。

チンドン屋と熊のヌイグルミは、呆然として立っている佐倉先生と吉村さんの前を通って下手から退場する。

暗転。

4 事件

同じ学童保育園の部屋。十一月の半ばのことである。

学童の後ろの壁には十一月のもの、例えはもみじなんか飾ってある。あかねの祖母の松と佐倉先生が椅子に座っている。吉村さんが畳にすわって大きな袋から柿を取り出し出している。

吉村 まあ、こんなに沢山。今日のおやつは柿にしましょうか。

佐倉（松に）本当にいつもすみません。でもあかねちゃんのおばあちゃんはすごいわね。こんなにたくさん柿を運んでくるなんて。

松 いいえ、運んだのはデカパン。ほらあかねを迎えに来てくれたから、家に寄ってもらって一緒に来たんですよ。

吉村 あかねちゃんはデカパンが迎えにくくと来てくれるのね。

佐倉 でも、あかねちゃんも明るくなって。学校へはまだ行けないけどちゃんと学童には来るんですから、もう大丈夫。

松 学校にいかないのは、やっぱり勉強がしたくないからなのかね。

佐倉 そんなことないですよ。あかねちゃんには感受性が強いから今のような学校にはなじめないんですよ。私、あかねちゃんの担任の先生は大嫌い。無責任で、学校に来たくない子は来なくていいなんて言うんだから。

松 そう、あかねは先生にそんなこといわれているの。

佐倉 先生達は子供のことより、父兄と教育委員会の顔色ばかりかし。

吉村（佐倉に）先生。

佐倉 授業は点をとることしか教えないし。

吉村 先生。

佐倉 どのクラスもなんだかいつも落ち着きがなくて授業中に歩き回る子や、おしゃべりばかりしているんです。

吉村 先生、あんまり学校のこと、そんなふうに言わないほうが。ほら、おばあちゃん

、あかねちゃんと、デカパンの二人でピーちゃんの小屋を作ったんですよ。

吉村先生が柿をむきながら松に窓（客席）の外を指でさして、見るように促す。佐倉と松が二人で首を並べるようにして客席のほうを見ながら。

松 本当、素敵な小屋が出来たわね。あら、ピーの他に別の鶏が居るの。

吉村 あれは雌なんですよ。ピーのお嫁さん。名前はポー。デカパンがピーだけでは寂しいからって貰ってきてくれたんです。

佐倉 ピーったら、ポーちゃんが来た時は、喜んで三メートルも飛んだんですよ。私、もうびっくり。

松 鶏もやっぱり嬉しい時は飛ぶんだね。あら二匹とも餌箱に首をつっこんで、お尻だけ見えてる。

佐倉 ほら、あかねちゃんが一生懸命、小屋の掃除をしているでしょう。

松 （伸び上がった）まあ、ピーが走りだし たわ。ポーもあわてて追いかけて。

佐倉 （伸び上がった）あら、ピーが塀の上に飛び上がったわ。

松 まあ、ポーもいっしょに。

吉村 わー、大変、飛んでいたら逃げだしてしまふ。（と、あわてて外へ行こうとして履物を持ってくる）

佐倉 あら、飛んだわ。

吉村 （あわてて、外に向かって）ウワー、誰か、捕まえてー！

佐倉 でも大丈夫。

吉村 どうしてですか。

佐倉 飛んだのは塀のこちら側。

吉村さんがずっとこけて畳の上にひっくりかえる。

松 でも鶏は鳴かないのね。

吉村 鶏は朝鳴くんじやないですか。あんまり昼間に鳴く鶏っていないですよ。

その時、鶏の鳴く声が聞こえる

佐倉、松 (二人いつしよに) 鳴いたわ。

吉村 (もう一度ずつこける)

入口から隆男と良太が帰ってくる。

隆男 先生、今日は大変やったぞ。

松 お帰り。

隆男 (松を見て) え、

吉村 あかねちゃんのおばあちゃんよ。

良太 あ、あかねちゃんのおばあちゃん。あかねちゃんも先生に怒られるぞ。

松 え、あかねが先生に。

隆男 違う。デカパンや。怒られるのはデカパンや。

佐倉 デカパンがどうかしたの。

ゆきとヤスが帰ってくる。ヤスはすぐに本を持ってきて見始める。

ゆき 先生、私もう学童へ来るのやめたい。

吉村 えー、ゆきちゃん、どうしたの。

ゆき 先生、タバコ吸っていい。

吉村 いいわけないでしょ。

佐倉 ゆきちゃん。何で学童、やめるなんていうの。

ゆき あかねちゃんが来てるやんか。

佐倉 何言ってるの。あかねちゃんのおばあちゃんよ。

ゆき 知ってる。おばあちゃんには関係ないことや。ともかくやめたい。

松 ゆきちゃん。教えて頂戴。うちのあかねがどうしたの。

ヤス 違うんです。問題は、デカパン。

佐倉 どないしたん。あかねちゃんがどうとか、デカパンがどうとか、先生やおばあち

やんにはぜんぜんわからへん。さあ、ちゃんとかかるように話をしてちょうだい。

四人の子供たちが、舞台中央に出て横に一列に並んで話をし始める。吉村さんがその横で子供たちを監督する先生のような位置に立つ。佐倉先生と松が横で観客のように椅子に座る

隆男 事件は算数の授業中に起こった。

佐倉 事件？

良太 そう、現場は五年三組の教室。

松 あかねの教室ね。

ヤス 教室で子供たちが勉強していると、デカパンが勝手に教室に入ってきて、一番後ろのあかねちゃんの机に座ったんです。

と、言いながらヤスがハロウインで使った熊の面と大きな外套のようなコートを持ってきて、子供たちの端に置いた椅子に座る。

良太 でも、先生は黒板に問題を書いていたから気がつかなかった。

吉村さんが、子供たちに背をむける。

ゆき それで、先生が黒板の問題を指して言ったの

吉村 (黒板を指差すように) この問題が出る人――。

隆男 すると、デカパンが手をあげたんだ。

ヤス 「ハイ」

吉村 あ、早いわね

隆男 と言って先生がデカパンを当てたから、デカパンがその場で立ち上がった。

ヤスが熊の面をつけ、コートを着て椅子の上に立ち上がる。

佐倉 (立ち上がった) あ、見てー見てー!

熊よ熊。熊が教室に入ってきたわ。

良太 みんなデカパンを見てびつくり。それから先生は大きな声で叫んだ。

吉村 みんな逃げて、早く逃げて。

良太 それで、五年三組の生徒はみんな校庭に非難したんや。

ヤスが椅子から降りて、ゆきに襲い掛かる。「にげるー」と叫んで舞台袖に逃げるゆき。ヤスは追いかけるが大きな外套に足を取られ、転んだりする。思わず声を出して笑う佐倉、吉村、松の三人。

吉村 でもどうしてデカパンはあかねちゃんの教室に行ったりしたんでしょう。

松 私があかねの勉強が遅れるから、心配やと言っているのをデカパンは聞いていたのね。それでデカパンが心配して教室に行つたのよ、きつと。

吉村 そうか。デカパンは教室に行つて、あかねちゃんのかわりに勉強して、後であかねちゃんに教えてあげるつもりだったのかもしれないですね。

佐倉 で、デカパンはどうしたの。

隆男 先生が叫んだから、他の先生が次々やっつけてきて、デカパンを押さえつけて、校長先生のところに連れていった。

良太 校長先生は、警察に連れて行くと言つてた。

佐倉先生が、突然走りだして学童の部屋を飛び出していく。

吉村さんが、「先生、先生」と、叫び佐倉の後を追いかけて。・・・暗転。

舞台中央に大きな机があり、他には何も無い。

吉村さんが裁判の時の裁判長のような帽子を被って、机の前に立っている。上手に校長、下手に佐倉先生が小さな椅子に座っている。

吉村 それではこれより、デカパンの五年三組教室侵入事件について裁判を行います。最初に校長先生から訴えの内容に述べて下さい。

校長 (立ち上がって胸をそらしながら) エー。その。エー。要するに。エー。何ですな。要するに。エー。デカパンは悪い。ないのであります。

吉村 ですから、どうしてデカパンは悪いのか、なのであります。

校長 それは、エー。どうしてかということ、要するに。デカパンはでっかいパンを一人で食べた、いやデカパンのパンツはでっかい、いや要するに、デカパンは神聖、厳肅たるべき教室で暴れたからなのであり、危険なのであります。よってデカパンを当学校にも、学校内の学童保育園へも出入り禁止にすべきである、なのであります。

佐倉 (立ち上がり) 違います。デカパンは暴れてなんかいない。先生がデカパンを見て突然叫んだから大騒ぎになっただけよ。

吉村 (佐倉に) 弁護人は許可なく発言をしないように。(校長に) デカパンは生徒でもないのに、どうして五年三組の教室に行つたのでしょうか。

校長 それは、要するに、何じゃ、天気がよかつたからじゃ。

佐倉 デカパンはあかねちゃんのために、少しでも力になろうと思って教室に行つたのよ。あかねちゃんは不登校児だから勉強が遅れると思つて。

吉村 では、デカパンとあかねちゃんは仲良しだったんですね。

佐倉 ええ、二人は学童と一緒に勉強したり、鶏の世話をしたりして、とっても仲良しだったわ。

校長 そんなことはどうでもいい。問題はデカパンが無断で教室に侵入したことじゃ。部外者が無断で教室に入ることは、学校の規則で固く禁じておる。大阪の事件もあつたことだし、デカパンのような怪しい人間から子供たちを守ることは学校の大切な責任である。規則、規則、規則、それこそが子供達を守る学校には必要なことじゃ。

吉村さんが校長のほうに笑顔で拍手をする。

佐倉 いいえ、子供たちに必要なのは愛情よ。そりゃ、勝手に教室に入ったことはいけないことかもしれないわ。でも問題はデカパンがなぜそんなことをしたかではないの。規則も大切だけど、デカパンの優しい心を、私達は理解すべきなんだわ。

今度は佐倉先生のほうに笑顔で拍手をする。

校長 大切なのは試験でよい成績をとって、りっぱな学校に進むことじゃ。

佐倉 いいえ、子供たちに必要なのは、思いやりの心を育てることよ。

校長 巨人じゃ。

佐倉 阪神よ。

校長 子供達をりっぱな大人に育てるためには、愛の鞭が必要じゃ。

佐倉 子供達は誉めてあげるべきよ。ちゃんといふことをしたときは、飴をあげて心から誉めてあげるのよ。

校長 いいや、何の、甘やかしてはいかん。

佐倉 (吉村に) 裁判長はどうなんですか。

子供たちに必要なのは規則ですか、愛情ですか。

吉村 (小さな声で)・・・私は。

校長 飴が鞭か。さあ、どっちかはつきりといいなさい。

吉村 私は・・・。ア、・・・アメ、・・・アメ、・・・アメ

佐倉 (校長に) ほら、やっぱり飴だって。

その時、突然雨が落ちてくる。

吉村 あ、アメが降ってきたわ。

校長と佐倉先生はあわててそれぞれ上手、下手に退場。

吉村さんは大きな傘を机の下から取り出して、微笑みながら傘を差す暗転。

6 クラッカー

あかねの家である。

中央にダイニングテーブルが置いてある。テーブルの上には大きなダンボールの箱と、パーティーの時に使用するクラッカーが沢山置いてある。クラッカーはほとんどが作りかけの材料だが、完成したものもいくつかある。

佐倉先生があかねの家を訪ねてきたところで、あかねの母親の道子が机の上の箱やクラッカーを片づけている。佐倉先生と道子が向かい合わせに座る。

道子 先生、こんなに散らかっててごめんなさい。

佐倉 これ、パーティーの時なんか「バーン」とやる、なんでしたっけ。

道子 クラッカー。もうすぐクリスマスだから

ら忙しいんですよ。

佐倉 そうごめんなさい。でもあかねちゃんのお母さんがこんなことなさってるなんて、知らなかった。

道子 別にお金もらおうと思ってやってる訳じゃないんですけどね。とつても忙しいからって頼まれてしまつて。

佐倉 お金、貰わないの。

道子 (ムツとして) 貰います。

佐倉 (クラッカーを逆に持って) でもこれ面白そうね。子供の時やったことあるわ。

道子 (佐倉に正しくクラッカーを持たせて) (こつですよ。反対にやったら大変。

佐倉先生がクラッカーの紐を引く。破裂音がして客席にクラッカーのテープが飛出す。

佐倉 本当、面白い。(嬉しそうに、また、クラッカーを破裂させる)

道子

佐倉 (別のクラッカーを手にとる) クリスマスみたい。

道子 先生、これ一応商売ものなんですよ。

佐倉 あら、ごめんなさい。あんまり面白いから夢中になつて。

道子 (奥にむかつて) あかね、先生がいらつしゃつてるから、テレビばかり見てないでこつちいらつしゃい。

佐倉 あら、あかねちゃんテレビ見てるの。

先生、このごろあかねちゃんが来ないから、どうしたのかなと思って寄つてみたのよ。ピーや、ポーや、皆んなもあかねちゃんが見えないから先生に見てきてほしいって言ったのよ。

道子 ピーやポーって、あの鶏達があかねに来てほしいって言つたんですか。

佐倉 (嬉しそうに) そうなの。

道子 先生、あかねはもう学童に行かせないようにしたんです。

佐倉 どうして。

道子 だって、おかしいでしょう。学校に行っていないのに学童だけに行くなんて。それに、あんなことがあった後だし。

佐倉 あんなことってデカパンのこと。

道子 そうですよ。何であの子があかねの机に座って勉強しなきゃならないんです。

佐倉 デカパンはあかねちゃんのこと思っただけだよ。

道子 先生、先生も学童も少しおかしいってみんなから言われてるのをご存じ。

佐倉 ……

道子 知恵遅れの子や不登校の子を鶏といっしゅに生活させてるって。うちの子もおかしいって言われてるんですよ。

佐倉 鶏って、あれはあかねちゃんのために、おばあちゃんが。

道子 だから嫌なんです。うちの鶏みたいで。おばあちゃんも私に何にも言わないで、勝手にあかねと学童に行ったりして。

佐倉 おばあちゃんのこと、そんなふうにいってもんではないわ。

道子 先生、私ね、本当は学校の先生になりたかったの。学校が好きだった。でも、高校の時にあの人と知り合って早くあかねを生んだりしたから、勉強はできなかった。だから、あかねにはすっかり勉強してもらって私の出来なかったことをさせてやりたかったの。

佐倉 勉強は、学校でなくても出来るわ。

道子 あかねは私の子なんですよ。あかねは六年生になったら私立の小学校に通わせるつもりです。

佐倉 あかねちゃんは「ガラスの動物園」のローラなのよ。

道子 え？。

佐倉 アメリカの劇の主人公。自分の家が華やかだったころの夢にしがみついた母親の見栄を背負わされて、現実の社会では生きていけない。

道子 私がその母親だと言っんですか。

佐倉 そうは言わないけど、あかねちゃんにはあかねちゃんの生き方があると思うの。それをお母さんはわかってないわ。

道子 (突然、クラッカーを佐倉に向かって破裂させる) 先生こそ、自分の感情や生き方を学童の子供達に押しつけて、子供の気持ちを無視しているわ。

佐倉 (クラッカーを道子に向かった破裂させる) 私は子供たちに、本当に大切なものがなんなのか知ってほしいのよ。

道子 (またクラッカーを破裂させる) そんなの、先生の勝手だわ。

佐倉 (同じように破裂させて) あなたこそ勝手よ。

と、奥から「うるさい、テレビが聞こえないよ」となるあかねの声が聞こえる。

暗転。

7 誘拐

十二月、クリスマスの近い寒い日のことである。

学童の教室に不器用な作りのクリスマスツリーが飾ってある。夕暮れで子供はいないが、吉村さんと小学校の校長、校務員の山田が残っている。吉村さんは椅子に座って何か考えている様子。校長と山田が部屋の中をウロウロと歩き回って二人でぶつかりそうになったり、クリスマスツリーにぶつかったりする。入り口から佐倉先生が急いで駆け込んできくる。

佐倉 いないわ。どこにもいない。今、鶏小

屋を見てきたけど、やっぱりいないわ。

吉村（椅子から立ちあがり）先生。すみません。先生がお休みの時にこんなことになつて。

山田 別にあんたが悪いんじゃない。たかが鶏が死んだだけじゃ。

校長 そうだ。これはやっぱり畜生の定めというものじゃな。

佐倉 やつぱり、ピーもポーも殺されたんでしようか。

校長 わしが見るところ、これは間違いなく殺されたんですな。

山田 そうですな。この場合自殺ということには考えられない。

校長（咳払いをしながら）今朝、山田君から電話を貰って僕が来てみたときはひどい有様でしたよ。

山田が舞台中央で二ワトリを発見したときの芝居をはじめ。それを見て佐倉先生と吉村さんが並んで、見ざる言わざるの猿のように目を覆う。

校長 鶏小屋の入口は開けっ放しでそこら中羽根だらけ。そばの溝に首のとれた雌の鶏の死体が捨ててあったのじゃ。

佐倉・吉村（二人で同時に口を抑える）

校長 あれほど、学童では生き物は飼わないようにと言っていたのに、私の言葉は聞いてもらえず、私としては遺憾です。

佐倉・吉村（二人で同時に耳を抑える）

校長（暫く二人を見て）確かに私は申年だが、それはこの際関係ないでしょう。

佐倉先生と吉村さんが誤りながら校長に椅子を勧める

佐倉 やつぱり誰かが鶏小屋に入って来たんでしようか。

校長 それは分からない。野良犬かイタチの

ような動物がもしれないがね。

吉村 でも小屋の入口が壊されていたんですよ。きつと悪い人間のしわざだわ。

佐倉 動物なら仕方ないけど、人間なら許せない。ピーやポーは仲良しだと思って気を許していたはずよ。

校長 でも、死体があつたのは雌のほうだけで、どういう訳か雄の死体はどこにもなかった。

山田 気味が悪かつたけんどな。小屋の中も外も搜したが、どこにもおらんかった。

吉村 先生、ピーの死体は見つからなかったんです。どこにも。

その時、あかねの母親の道子が慌てた表情で入ってくる。

道子 先生、大変、帰って来ないんです。

佐倉 お母さん。もう慌てたつてあの子たちは帰つてこないんですよ。殺されたのよ。

道子 殺されたつて何を言つてるんですか。

ただ、家に帰つてきてないだけよ。

校長 家に帰つて来ないつて、あんたの子供さんかね。

道子 そうなんです。うちのあかねです。

佐倉 (校長に) 五年なんです。

校長 そりゃ。大変だ。

吉村 でも学校には行つていないんです。

校長 なんだ。それならいいんだ。

佐倉、道子、吉村の三人が非難するよ
うに校長を見る。

校長 あかねちゃんというのは、あの時の、あのでっかい熊が五年の教室で暴れたときの不登校の女の子だな。確かあの熊はデカパンとかいったな。今日はデカパンはどうしたのかね。

吉村 今日はデカパンは奈良の作業所に行つて
るからこつちには来てないんです。

佐倉 デカパンがないのに、あかねちゃん、学童にきてくれたのね。

道子 ええ、今日は私、家で作った品物を、会社に届けるために出かけたんで、あかねは学童に行かせたんです。

吉村 せっかくあかねちゃんが来てくれたのに、仲良しの鶏たちがこんなことになるなんて。

佐倉 子供たちには、鶏のことを話したの？

吉村 いいえ、あかねちゃんや子供たちにはこんな可愛そうなことはとても話せない。

だから鶏達はどんぐり山のわとり園に預けたと言ったんです。

山田 鶏の駆け込み寺みたいなもんやな。

校長 最初からわしの言う通り、にわとり園に預けとけばこんなことにならなかったんだ。

佐倉 それで、あかねちゃんは一人で帰ったの。

吉村 いいえ、今日はゆきちゃんやヤス君と一緒に帰ったはずですよ。でもあかねちゃんが帰ってないなんて、私、ゆきちゃんの家で電話して聞いてみます。

吉村先生が舞台脇に行つて携帯で電話をする。その間、舞台中央では次の会話。

校長 まあ、学童でもこれからは何事も学校の方針に従つていただくといいこと。

佐倉 (校長をにらむ。)

校長 不登校の子はどうしても家庭に問題があるようですし、そのへんはお母さんにも理解していただいて。

道子 (校長をにらむ)

吉村があわた様子で舞台中央へ。

吉村 先生、ゆきちゃんもまだなのよ。でもヤス君は帰ってましたわ。

佐倉 ゆきちゃんもあかねちゃんも一緒なの。

吉村 ええ、ゆきちゃんもあかねちゃんもほかの小さな子供たちと一緒に、ピーやポーに合いにどんぐり山に行くっていつて出かけたらしいの。

山田 そうか。あんたが鶏たちをどんぐり山のにわとり園に連れていったと子供たちに言っただから、みんなそれを本当にしたんじゃないな。

道子 でもどんぐり山なんて電車で行っても一時間はかかるわ。子供たちは、どこにいけばいいかわからないでしょう。

吉村 そうなの。ヤス君やみんなは途中でやめようって行って帰ってきたんだけど、あかねちゃんとゆきちゃんは、デカパンに連れていってもらうと行って、デカパンの行ってる作業所に行ったらしいの。

佐倉 そう、前に子供たちをデカパンが行ってる作業所に連れていったことがあるから場所を知っていたのよ。

吉村 ええ、でも今作業所にも電話したけど、そんな小さな女の子は来ていないって。それにデカパンも今日は早く帰りたいといってお昼過ぎに帰ったらしいんです。

道子 デカパンは休んでるんですか。

山田 デカパン、デカパン、いつも問題を起こすのはあの熊ですな。

校長 まったく、あのウスノ口の熊には困ったもんじゃ。

隣の校務員室で電話のベルがなる。全員が、驚いて顔を見合わせる。校長が、校務員の山田に電話に出るように促す。

吉村 先生、私どうしよう。わたしが鶏をどんぐり山に連れて行ったと言ったばかりに。

佐倉 大丈夫よ。ゆきちゃんも一緒なんです。

もの。子供たちはちゃんと戻ってくるわよ。
。あなたのせいじゃないわ。

道子 デカパンよ。デカパンに違いないわ。
デカパンが子供たちを連れていったのよ。
(佐倉に)ね、先生、そうなんでしょう。

上手から山田があわてて登場。

山田 校長先生、大変な事になりましたぞ。

校長 何じゃ、何がどうして、どうしたんじや。

山田 電話がありましたぞ。

校長 だから、何の電話じゃ

山田 うちの学校の帽子をかぶった女の子が
大きな男といっしょにどんぐり山に登って
行ったそうなんですじゃ。

佐倉 女の子が帽子を？

校長 そりゃ、変じゃな、確かにうちの学校
には男の子にも、女の子にも決められた帽
子があるがな。

吉村 誰が決めたんでしょうね。あの変な
帽子。まるで魔女の帽子みたい。

校長 (吉村をにらんで)わしじゃ。だから
女の子はだれもかぶらん。

道子 (突然)あかねだわ。その女の子はあ
かねに違いないわ。あの子はいつも帽子だ
けは学校の帽子をかぶっていたもの。

山田 じゃあ、大きい男というのはやっぱり
デカパンですな。

道子 デカパンがうちのあかねを誘拐したん
だわ。

吉村 (驚いて)誘拐なんてそんな。

道子 黙って連れて行ったら誘拐じゃない。

吉村さんが佐倉先生に助けを求めると
うに走り寄りながら・・・。

吉村 先生、何とか言つて。私、デカパンが
あかねちゃんをドングリ山に連れて行った
なんて信じられない。こんな時間に山に行

ったら危ないし、みんながどんなに心配するかわかっているはずなのに。

校長 やっぱり危険な熊を出入りさせるからこんなことになるんじゃない。

佐倉 いいえ、デカパンなら大丈夫。あの子はいつもあかねちゃんのことを大事に思っていたもの。

道子が部屋の隅にあつたほつきを持って、佐倉先生をにらみつける。

佐倉 (驚いて)お母さん。

道子 いいえ、誘拐だわ。これは誘拐よ。

校長 誘拐だとしたらゆゆしきことだ。警察、テレビ、記者会見。

山田 校長、散髪にも行つとかないといけませんな。

吉村 あかねちゃんは学校には行つてないんですけど。

校長 そうだった。記者会見はいいんだ。

道子 でも学校の帽子はかぶってるんです。

校長 そうだった。やっぱり記者会見だ。

佐倉、吉村、道子の三人が「パン」とテーブルを叩いて校長をにらむ

佐倉 ともなくデカパンはそんな悪いことをする子じゃないことだけは確かだわ。

校長 いいや、そうは言えんぞ。今朝のこともあるし。

佐倉 え、今朝のこと？

吉村 先生、今日の朝、鶏小屋のあたりでデカパンにそっくりな人がウロウロしていたんですって。

佐倉 え、？

山田 学校にそんな電話があつたんだ。背の高い大きな男が鶏小屋のあたりをウロウロしているって。

佐倉 でも背の高い人だけで、どうしデカパンだって言えるの。

吉村 でもその人、上下つなぎの作業服を着ていたんですって。

佐倉 え、？

吉村 ほら、デカパンがいつも着ている、あんな作業服。

佐倉 吉村さん。何を言うの。

吉村 先生、私はそんなこと信じない、信じないけど・・・。

山田 確かに鶏を殺したのはデカパンに間違いないありません。これはデカパンの復讐ですぞ。この間のことで奴は学校や校長先生を恨んでいるんじゃない。

校長 なんと、憎つくき奴じゃ。

山田 とうとう、やつは獣の正体を現したのですな。(道子に) そうじゃ、たぶんデカパンはどんぐり山で、あんたの子供を鶏とおんなじように・・・。

校長 (興奮して) 山狩りじゃ、山狩りじゃ。わが小学校の総力をあげて、危険なくまを捕まえるんじゃない。

山田が不気味な格好で首をしめるような真似をする。校長が興奮してバンバンと床を鳴らしながら歩きまわる。それを見て驚いて道子が「あかね」と叫びながら、あわてて顔を抑えて舞台袖に入る。吉村さんが道子の後を追おうとして、思い返して佐倉先生にすがりつく。

吉村 先生！。

佐倉 (暫く茫然としているが、突然席をきったように) あなたたちは何を言ってるの。(校長に) 校長先生、デカパンはあなたたちよりずっとリッパよ。あの子は本当に子供たちが好きなのよ。(山田に) 鳥のインフルエンザがはやった時、あの子はテレビで沢山の鶏が殺されるのを見て泣くのよ。(道子に) お母さん、デカパンは誰よりもあかねちゃんのことを心配しているのよ

。学校でいつもテストの成績を気にしている子より、一生懸命鶏の世話をしている子のほうがちゃんと生きていると思わない。そうだわ。あの子たちはピーとポーが生きていると信じているんだわ。だから二人で捜しに行ったんだわ。そうだわ、もしかしたら・・・

吉村 もしかしたら・・・

佐倉 そう、もしかしたら・・・

舞台が次第に暗くなる。

舞台上手に立つ吉村さんだけにライトが当たり・・・

吉村 もしかしたらと佐倉先生は言いました。もしかしたら、あの時、死体のなかったピーは本当は助かったのかもしれない。電話の人が見た大きな人というのは、やっぱりデカパンだったのかも知れない。デカパンは傷ついた鶏のピーを助けるために、鶏小屋に行ったんだ。でもそんなおとぎ話をまとも聞く人はいませんでした。校長先生も山田さんも、あかねちゃんのお母さんも、そしてこの私も・・・

それから私たちはみんなであかねちゃんを捜しました。でもすぐにあかねちゃんとデカパンは見つかりました。二人を見つけたのはゆきちゃんのお父さんでした。私が電話した後、暫くして家に帰ってきたゆきちゃんから、二人が町はずれの丘の上に行つたことを聞いたお父さんはすぐに自動車で二人を捜しに行ってくれたのです。丘の上で二人は手をつないで、夕暮れの町をじっと見つめていたんだそうです。

下手にもライトが当たり、ライトの中に電車の椅子のようなものに座るデカパンとあかねが浮かび上がる。あかねは魔女のようなむらさき色のとんがり帽子をかぶり、鶏の面をつけている。デ

カパンはジーンスのつなぎの作業着を着て、熊の面をつけている。二人は客席にむかつて並んで座っている。

吉村 そんなことがあってから暫くして、佐倉先生は学童をやめました。デカパンもあかねちゃんも、あの日から学童には来なくなりました。佐倉先生が学童をやめた時、お父さんやお母さんの中には、あの変わった先生にはやめてもらったほうがよかったという人も沢山いました。でも学童の子供たちは、そうは思っていません。その証拠に学童には生き物や弱いものを苛めたり、殺したりする子はいなくなりました。

デカパンとあかねが静かに座席を立てて手をつないで舞台から出て行く。吉村さんにあたるライトだけを残して舞台から明かりが消える。

吉村 あの時、デカパンとあかねちゃんがどうして丘の上の公園に行ったのか、私たちが何度聞いても二人は答えてはくれませんでした。でも二人がどんなに悲しかったか、鶏たちの死がどんなに二人を傷つけたか、私にはわかるような気がしません。

私は今でも、時々鶏のことを思い出します。ほかの大人たちは鶏なんて養鶏場にいけばいくらでもいるといいます。

でも名前をつけていっしょに遊んだ鶏は、只のたまごを生むだけの鶏とはやっばり違う。だから、死体の発見されなかった雄鶏のピーだけでも実はうまく助かっていて、ひとりではるか遠くのドングリ山のにわとり園にたどりついて、仲間の鶏たちと一緒に元気に暮らしながら、私やあかねちゃんや、デカパンや、それから佐倉先生が会いにくのを待っていてくれる、そんなことを考えてしまっんです……。

明かりが静かに消える。

8 一年後

翌年の十月のある日。元の学童保育園で、佐倉先生と道子が窓際に座って話しをしている。部屋の後ろで吉村さんが、箱の中から八口ウインの仮装道具や子供の作った仮面を取り出して点検している様子。

明るいい秋の日で部屋の中にも明るい穏やかな光が差し込んでいる。

佐倉 (部屋の真中におかれた段ボールをあけて) まあ、こんなに沢山、吉村さん、あかねちゃんのお母さんからこんなに沢山、柿をいただいたわ。

吉村 わあ、うれしい。あかねちゃん、元気に新しい学校に行ってます。？

道子 ええ少し遠いんですけど、あかねには私立のほうがいいような気がするんです。

佐倉 あかねちゃんが元気に行ってるんなら、よかったわ。

道子 有名中学を目指す子が多いから大変らしいけど、その分目標ができるし、でもあかねは二年もブランクがあったでしょ。だから他の子と同じようにできるか心配なんですけど。

吉村 あかねちゃん、勉強好きだから、きっと大丈夫ですよ。

といいながら、佐倉先生と吉村さんがダンボールごと柿を運ぼうとして箱を持ち上げる。すると、段ボールの底が抜けて柿が転がり出る。三人は「あらあらあら」と言いながら転がった柿を集めて回る。

佐倉 (柿の一つをかざして)これ、おばあちゃんの家の柿でしょう。こんなに大きい。

吉村 それに甘いんですよ。あかねちゃんのおばあちゃんの柿は。

佐倉 私、おばあちゃんの家の柿を食べるといつも夏目漱石の歌が浮かんでくるの。

道子 (不思議そうに)どんな歌？

佐倉 柿くえば、

吉村 (合わせるように)柿くえば、

佐倉・吉村 (一緒に)鐘が 鳴るなり 法隆寺。

吉村 私も。でも先生この歌、漱石じゃなくて島崎藤村ですよ。

佐倉 漱石よ。

吉村 藤村ですよ。

佐倉 吉村さんは頑固ねえ。

吉村 先生こそ。

道子 (あきれたように二人を見て)正岡子規でしょ。たぶん。それにそれは歌じゃなくて俳句なんですけど。

佐倉・吉村 (顔を見合わせて)あ、そうなんだ。

言いながら二人で柿の箱を持って部屋の外へ。道子の方へ声をかける。

道子 本当にびっくり。知らなかった。佐倉先生がまた学童に戻ってられるって。

佐倉 ええ、私の後に入った先生が、急にやめられたでしょう。また吉村さん一人になって大変だからって、次の先生が見つかるまで。

吉村 私が父母会の会長さんをお願いしたんです。佐倉先生に頼んでくださいって。

佐倉先生と吉村さんが再び登場。

佐倉 それに吉村さんも、もうすぐやめるからって。

道子 あら、吉村さんもやめるの。

吉村 まだ、来年ですけどね。

佐倉 吉村さん、念願だった小学校の教員に採用が内定したんですよ。

道子 まあ、そうなの。

佐倉 でも、いま先生になるのって難しいでしょう。

道子 そうらしいですね。私たちの時代と違って今はほら、県の有力者や学校の上のほうの人のコネでないと受からないって話ですよ。吉村さんもやっぱり、コネ。

吉村 (少しムツとして) いいええ、残念ながら私にはそういうものは・・・。

道子 (明るく) あら、そうですね。

吉村 ございましてよ。

佐倉 (笑いながら) 校長先生が吉村さんは優秀だからって口を利いて下さったの。

道子 まあ、あの校長。狸だと思っていたらいいところもあるじゃない。

三人が顔を見合わせて笑う。

道子 そうそう、来週の三十一日、何でしたほら、アメリカの子供のお祭り。

佐倉 ハロウィン

吉村 はい、今年も子供たちと遊ぼうと思って去年作った仮装の衣装や、仮面を整理してるんです。

道子 でね、この魔女の帽子を学童に返しておいてくれて、あかねに頼まれたんですよ。

吉村 あら、よかった。先生が使った魔女の帽子が見当たらないんで、もう一度作ろうかと思つてたんですよ。

佐倉 (笑いながら) 私は今年も魔女？

吉村 はい、もう、子供たちにバカうけしましたからね。でも、どうしてあかねちゃんが持つてたのかしら。

道子 あかねはこの帽子を何だか大切にしていたみたいですよ。

佐倉 (遠くを見ながら) あかねちゃんはズツと待っていたのかもれないわ。

道子 え、待つつて何をですか。

佐倉 お母さん、一年前のクリスマスの前の日のこと。

道子 一年前？

吉村 にわとりのピーとポーが殺された日でしたね。

佐倉 そう、あの日のこと、デカパンとあかねちゃんは、町外れの、ほら、あの丘の上の公園に行っただでしょう。

佐倉先生が窓の外(観客席の方)の遠くを指差して、何かを思い出そうとする。

佐倉 吉村さんは子供たちに、鶏をどんぐり山のにわとり園に連れて行っただって言ったけど、子供たちはみんな知っていたのよ、ピーとポーが襲われて死んだことを。

道子 今の子供たちには、そんなことはすぐにわかるわ。

佐倉 (道子に) でもあかねちゃんだけは、ピーは生きてるって、死体がみつからないのは生きてるからだって。そう言っただってゆきちゃんが私に教えてくれたんですよ。

吉村 (少し涙ぐんで) あかねちゃんが一番可愛がっていたんですものね。

佐倉 襲われて傷ついたピーちゃんは、きつと魔女のところに逃げていくって言ったんですって。

吉村 あ、それで、あかねちゃんは、この帽子を持っていたんだ。

佐倉 そう、それは傷ついた小鳥や動物たちを生き返らせる魔法の帽子。

道子 そうなんですか。あかねはピーがやってくるってズツと信じて、その魔法の帽子を持っていたんですか。

三人が立って舞台の中央に集まって遠

くの丘の上を見る。

吉村 でも、どうしてあの時、あかねちゃん
とデカパンは、あんな寒い丘の上なんか
行ったんでしょ。

佐倉 ほら、子供たちの本に書いてあったじ
ゃない。魔法の帽子で動物や小鳥を生き返
らせる魔法使いのおばあさんは、森のむこ
うの丘の上に住んでいるって……。

(幕)